

記録映画『嗚呼 満蒙開拓団』（羽田澄子監督）

の撮影現場から

奥村 正雄

ハルピンから方正へ高速道路で185キロ、3時間近いマイクロバスでの移動。この間、トイレ事情はどうか、羽田さんは方正ロケを決断する前、「私は生まれつき腸が弱くて…」と言って、この不安で方正行きを迷ったようだった。が、訪中を決断し、いま見渡す限りとうもろこし畑のつづく広野を疾走するバスが、途中、ガソリンスタンドでトイレ休憩しても、彼女はその不安がウソだったように、バスから降りて一息入れている同行者にインタビューし、カメラを向けさせ続けた。

2007年8月22日から26日まで4泊5日。一行12人のうち、羽田さんと助監督Sさん、カメラのKさん、それに以前羽田さんの事務所にて、いまは北京の日本大使館で通訳をしているPさんが助っ人としてハルピンで合流していた。

Ψ 鎮魂のシャボン玉

日本人公墓の周辺は背の高い赤松が多く、すでに秋の気配が濃くなった墓地の虚空にサワサワと松籟が聞こえ続けた。それを鎮魂曲とするように、一組の教員夫婦が日本から携えて吹くシャボン玉が林間にゆらいで消えていった。62年前、各地の開拓団からここ方正へたどり着くまでに、多くの老幼婦女子が事切れた。シャボン玉を飛ばし続ける夫妻には、教室での光景と62年前、荒野で消えていった子供たちが重なっているようだった。

宿泊する宿に戻ると、ロビーに残留孤児を育ててくれた3組の養父母が待っていた。部屋で話を聞く。92歳の魯万富さんは少し耳が遠くなっているが、身内に付き添われて、インタビューに大きな声で答えてくれた。魯さんが育てた孤児が愛知県にすることを知り、1年後の今年、5月7日から11日までの2度目のロケにその養女の夫が同行、久しぶりの再会シーンがカメラに収められたが、最近、93歳で他界されたことを、私は先日完成し、第21回東京国際女性映画祭で公開されたフィルムの、無言の白い文字で知った。この魯さんは今年の1月、北京から日本の大使夫妻がハルピン、方正を訪ねたときに、方正で大使に招かれ、孤児を育ててくれた養父母の代表として慰労されたのだった。

Ψ 砲台山に分け入る

日本人公墓は砲台山の麓にある。資料館の赤い屋根が、周りの緑一色の中で、遠くからでもそれとわかるが、45年前、おびただしい白骨を見つけた松田ちゑさんの申請で、最初に木の墓標が建てられたのは、今の公墓からもう少し砲台山に分け入った場所だ。昨年、撮影班はこの公墓の原点を撮ろうと方正県政府外事僑務弁公室の李副主任の先導で山あいに分け入った。だが行けども行けども、それらしい場所にたどり着けない。

『標高が少しも上がらない感じだね』

などと言いながら李さんの後に従う。路傍の片隅に薄い石板の墓碑が建てられ、周りの藪のところどころに紅い布切れがぶら下がっている。昔、身内を土葬した場所に、最近、少し小金ができた近親者が新しく墓標を立てて供養した跡のようだ。

結局、この時は引き返すほかなかった。

Ψ 田の中を走る 82歳

2年目の今年は、背景の季節感を変えるためもあって訪中を5月上旬とした。15名の墓参団のうち撮影スタッフは5名。2台のカメラで立体的な画面を作るための増員だった。もう一つ昨年と変わったのは、魯万富さんの養女の夫・丸沢恒好さん（74歳）が開拓団関係者として加わったことだ。

墓参団の8名と、撮影班の6名とに分かれ、私は撮影班に入る。2台のマイクロバスで丸沢さんが母親と暮らした村へ行った。2台の車にそれぞれ携帯電話と無線機を持ったスタッフが乗り込み、撮影場所が別々でも緊密な連絡を取りあう。村に着く。丸沢さんの親戚の村人のあとを追って、田んぼの片隅に少し盛り上がった土饅頭のお墓に向かう。幸い好天続きで農道の乾いた土が盛り上がったところを足先で選びながら歩を運ぶが、いったん一雨くればたちまち歩けなくなる農道だ。急ぎ足でお墓へ向かう列を撮るため、カメラマンが田んぼの中を走って先へ回る。羽田監督もそれを追う。82歳とはとても思えない足捌きだ。

土饅頭のお墓に果物やお菓子が供えられる。紙銭が燃やされ、龍賓酒（焼酎の類の地酒）をかけて手を合わせる。それを2台のカメラが違う角度からとらえる。

部落へ戻って丸沢さんが親戚の人たちと別れの挨拶をする。「泊っていけないのか」「こんど何時くるんだい？」丸沢さんの手を農婦が泣きながらつかんで放さない。

Ψ 公墓の原点へ

1日早くハルピンに戻った墓参団は帰国前日、731部隊跡の見学や松花江岸、帝政ロシア時代に作られたキタイスカヤ通りの遊覧、買物などの日程。同じ頃、撮影班は公墓の撮り足りなかった風景を撮っていた。撮影班だけが向かい合う林の中の公墓は、秋風に鳴る樹々の葉ずれの音が、いっそう荒涼とした感じに変わっていた。次いで新しい情報をもとに、最初に白骨が見つかり、木の墓標が建てられた、いわば公墓の『原点』を撮ることになった。木の墓標が建てられてまもなく、そこにダムが作られることになって墓標は現在地へ移動することになった、そしてその機会にハルピンから現在の花崗岩の墓碑が松花江を船で運ばれて、今の場所に建てられたのだった。その原点への道は、当時の事情を知る人の案内で、車で簡単に行くことができた。昨年、あてどもなく山あいの道を歩いて探したのが嘘のようだった。ダムは自然湖のように素朴で、60年前、飢えと寒さと疫病で息絶えた故人たちにとっては、静かな安息の場所にも見えた。

（おくむらまさお、本会参与）